

『津久井やまゆり園』殺傷事件

2016年07月29日

相模原市緑区にある知的障害を持つ人々が入所している「津久井やまゆり園」で19人が刺殺され、26人が重軽傷を負う事件が起こった。容疑者は「園」の元職員の植松聖で、戦後最大の大量殺害事件となった。内容を知ると、怒りを超えて、戦慄する。その戦慄は障害者たちを抹殺することが社会的正義と見なしていることである。事前に衆議院の大島理森議長宛に手紙で、障害者を抹殺することができる、常軌を逸した発言であることは重々理解しているが、と書き、下記のように綴っている。「しかし、保護者の疲れ切った表情、施設で働いている職員の生気に欠けた瞳、日本国と世界のためと思い、居ても立ってもいられず本日の行動に移した次第であります」。殺害予告計画も書いており、予告通りのことを実行してしまった。容疑者は「津久井やまゆり園」の内部を熟知しており、短時間に50人近い人々を殺傷することができた。狂気という他ない。障害者たちは日々、生きようと闘っていた。彼らの無念さ、そして、命を愛おしんできた遺族、被害者家族の悲しみ、怒りはいかばかりかと推察する。

この事件を聞いて、誰もがドイツ・ナチズムの「T4作戦」のことを思い出すのではないか。障害者を価値のない生命、ゲルマン民族への負担として「灰色のバス」に乗せて、殺害場所へ送り、毒殺、餓死などで抹殺していった。その数、24万人と言われている。精神病患者、同性愛者、劣等民族と見なした人々なども「安楽死」させた。ゲルマン民族の優越性を誇示したのであるが、戦争は総力戦で、経済効率を求めたのである。もちろん、「T4作戦」に反対した人もいた。ミュンスターのクレメンス・アウグスト・グラフ・フォン・ガーレン司教は説教で公然と批判した。また「灰色のバス」で収容に来た時、「彼らを殺すなら、私を殺してからにしろ」と立ちはだかつて、抗議した施設長もおられた。

容疑者は子どもの頃は、明るく成績も良かった、小学校の教諭になりたかったと聞く。その職に就けず、「津久井やまゆり園」の職員になった。その彼が、どうして弱者を抹殺することを正義と考えるようになったのであろうか。心が崩れたのである。そうでなければ、あのような残忍なことはできない。2001年に、大阪の池田小学校に凶器を持った男が侵入し、8人の児童を殺害し、15人に傷害を負わせた。抵抗できない幼い子どもを殺害した事件に社会は揺れた。今回も同質である。

犯罪を犯した人は、その責任を負わなければならないことは当然である。同時に、このような無差別殺傷犯罪に追い込む社会的要因も冷静に考えなければならないのではないか。望む職が得られない。あっても低賃金で将来の希望が持てない。「死刑が希望」「戦争が希望」と言う若者もいる。停滞した生活は犯罪を犯して死刑になるか、戦争によってしか、今を脱却できないと言うのである。若者たちを取り巻くニヒリズムは限りなく深い。

今や、中東はもちろん、フランス、ドイツ、アメリカでテロが続発している。そして、テロもどき、満たされないうっぷんを晴らすかのような銃と刃物による殺傷事件が報道され続けている。かつては「強きをくじき、弱きを助ける」と言ったが、最近では「強きにおもねり、弱きをいじめろ」風潮にある。弱きに置かれた人が、更に弱い立場の人々を攻撃対象にする悲しい現実がある。強く、豊かで、美しく見えるものを至上とする単一価値観から、多様な命の尊厳を認め合う社会を作り上げていくことが、これらの犯罪を防ぐ力となる。弱い人たちが、どのような立ち位置であるかによって、その社会の文化程度が測られる。他人事ではなく、我々の生き方に関わる問題として捉えるべきではないか。